

《卒論報告》

小中国語科における漢文教育の変遷と展望

副題 - 『論語』教材を中心として-

酒井 慎太郎

キーワード：漢文 『論語』

1. 問題の所在と目的

平成 20 年改訂の学習指導要領より、小学校国語科の中で「古文」「漢文」を伝統的な言語文化として指導することが定められた。近年、外国語活動の教科化やプログラミング教育の必修化など、限られた時間数の中で学ぶべきことが増え続けている。その中で、もともとは中国の文章である「漢文」を国語科として指導することに意味はあるのかというのが本研究の問題の所在である。

これまでの漢文教育の変遷を整理し、今後「漢文」を小学校で学び続けるとする時、どのような目標・教材が適切かを検討していく。

2. 研究方法

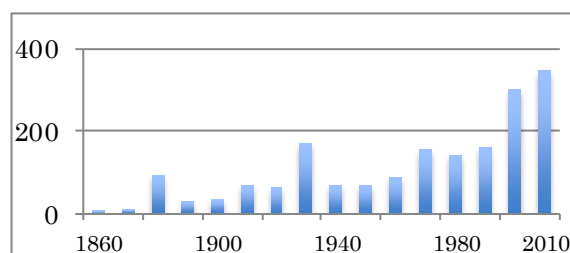
明治から現在に至るまで、漢文教育に関する法律、学習指導要領を調査し、その時代ごとに「漢文」がどのように学ばれていたのかを調査する。

また、漢文教材として長年使用し続けた『論語』の出版数の調査を行う。調査方法はNDL—OPACを用い、検索ワードを「論語」、1868 年以降の「図書」「和古書・漢籍」に限定して検索を行った。現在『論語』がどのように注目されているのかを知り、漢文教育の意義を探る手がかりとする。

3. 結果

明治初期には、「漢文」は読み書きの中心的役割を担っていたが、「和文」の概念が定着し、徐々にその地位を失う。大戦前は、国民科の中で「古典トシテノ漢文ヲ通ジテ皇国及東亜ノ思想、文化ト其ノ表現トヲ会得セシメ」と定められ、軍国主義的役割を持つ。戦後、その責任を取る事となり、思想教育としての漢文教育はタブー視されるが、国民の道徳性の問題から徐々に思想に関する教育を行うことになる。その後、日本の古典として漢文は学び続けられる。高等学校で初めて漢文に触れると漢文嫌いになる生徒が多いことから、中学校で親しむことが目標となり、その後伝統文化が重視されたことにより小学校で学ばれることとなる。小中学校はあくまでも漢文に親しみ、触れることで高等学校での学びに繋げていく。

『論語』に関する書籍の調査結果は以下のグラフの通りである。（縦軸：冊数 横軸：年代 結果は2017 年 1 月 20 日時点）



特に 2000 年以降に出版数が増加している。このブームの原因について明確な結論は出ていないが、『論語』に関する書籍のまえがきの多くに「心の健康」「人生の指南書」と書かれており、現代では思想の面で『論語』は重宝されていることがわかる。

現在漢文教育が学ばれている背景には、グローバル化が進んでいることが挙げられる。様々な文化を背景に持つ人と接する機会が増え、より自国の文化を理解することが重要になった。しかし、前述の通り、小学校で学べる授業時数は限られているため、どの文化を重視するかが重要になる。

4. 考察

漢文の教材は日本の文学、言語、思想に関するものを扱っている。小学生が自国の文化として身近に感じ、親しみを持ちやすいのは文学に関するものではなく、思想、言語に関するものではないだろうか。今後小学校で漢文教材からどのような日本の文化を学ぶべきか改めて考える必要があると感じた。

5. 主な参考文献

石毛慎一 (2009) 『日本近代漢文教育の系譜』 湘南社

加持伸行 (2009) 『論語 増補版』 講談社学術文庫

(横浜国立大学 教育人間科学部)